



キャンプが多くの人々の
原風景になりますように

中村 敦

Nakamura Atsushi

元京都YMCAリーダー
富士山YMCA運営委員
横浜YMCA常議員

▼1960年代のキャンプ

1963年、小学4年生の私が初めてサバエキャンプに行った年です。男の子はランニングシャツ、女の子はシミーズ姿などで遊んでいた時代でしたが、すでにタオル地のTシャツのキャンプシャツがあり、当時としてはかなり画期的だったと思います。また、キャンプの食事朝食にはパン、夕食のおかずにはスコッチエッグなどの洋食があり、今思えばその当時のYMCAのキャンプは新しい文化や生活スタイルを社会に提言したのではないのでしょうか。

私のメンバー時代の思い出に残るキャンプといえば「中学生男子キャンプ」。水泳、ボートはもちろん、ボートを沈めてそこからの救命活動等も競技として遊んでいました。時間があればソフトボールや松ぼっくり合戦など4~5泊のキャンプ中は思いっきり身体をつかい、毎年帰る時には声がかれていたものです。キャンプサイトをすべて使った男ばかりの80名のキャンプはメンバー、リーダーとも体力的にはへとへとになる過酷なキャンプでした。そんなキャンプは初めて会う人たちと短時間に親しくなる力をつけ、キャビンがグループとして一体化して過ごす結束力、社会性をはぐくみ、生活の中でごく自然にメンバーの得手不得手や好き嫌いがわかってくる他者理解の力をはぐくむものでした。そんな琵琶湖岸のサバエキャンプ場は白砂青松の素晴らしい環境でした。

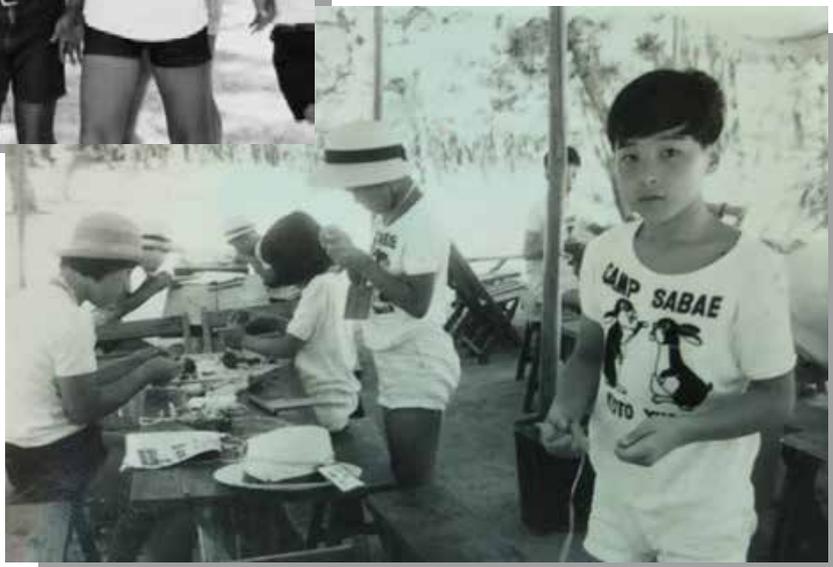
▼1970年代のキャンプ

1972年にリーダーになってからはいろいろな経験をしました。リーダーには子どもたちとともに生活するカウンセラー、管理を担うスタッフという役割があります。「安全は全てに優先する」を実行するために全ての作業に意味がありました。設営開始時にはゴミだらけの浜を早朝から掃除し、最後は砂をふるいにかけてガラスなどを取り除き、ドブさらいや花道¹など人が嫌がる仕事を何回やったかを誇りにするスタッフの世界。嫌なことでも誰かがやらなければならないことは自らやるのだという精神が養われました。そんなリーダーたちのスタッフキャビンの中は厳しくもありましたが、いたわりと励ましがベースにあり、喘息を持っているリーダーもいましたが、自然と無理をさせないように仲間がカバーしていました。スタッフのチーフリーダーはリーダーの体調管理も役割としてあり、キャンプ長との信頼関係は強いものでした。



▲リーダー時代、後ろ中央が本人

▼キャンパー時代、小学6年生



スタッフは裏方に徹しており、キャンプの主役はメンバーであり、キャンプを進めるカウンセラーがキャンプ場では主体。管理スタッフの側はできるだけ目立たないようにすること、サイト内の道を歩くときは下を見て歩き危険物やごみがないかをチェックしながら素早く歩くように努めていました。70年安保の傷跡で、リーダー希望者が減少し、リーダーシップの伝承に危うさを感じましたので、キャンプの動き方を先輩やOBにヒヤリングをしてマニュアルにまとめたことが今でもキャンプ場に伝統として息づいているところがあれば幸いです。

¹ 当時はバキュームカーのホースが届かないトイレは、リーダーたちが桶に組み上げて運んでいた。臭くて汚いから皆がよけて道を作ることから「花道」と呼ばれた。

▼サバエに大型カッターボートがやってきた！

サバエキャンプにネッシーと命名した大型のカッターボートが来たことは当時には大革命でした。それまではナポレオンという小型カッターボートはありましたが、この船が来たことで今まで眺めているだけであった遠くの「沖の島」まで行くダイナミックなプログラムができるようになったのです。

このカッターボートは東京商船大学から東京YMCAの幹旋で野尻湖キャンプ場、千葉YMCAの印旛沼キャンプ場と京都YMCAのサバエキャンプ場に1艘ずつ配分されたそうです。

その後、リーダーたちが古い塗装をはがしてコーキングをしてペンキを塗りなおしました。この船はさすがに湖の上では素晴らしい安定感で、「沖の島」まで安心して漕いでゆくことができました。この冒険にはいろいろな出来事もありました。いきなり強風が吹き三角波が立って湖がひどく荒れだした時には、島のお寺に子ども達を待機させ、少し波が収まってから「沖ノ島」の漁協にお願いし漁船に曳航していただいてキャンプ場の浜まで帰ったこともありました。

残念ですが、自然と開発は大きなテーマです。琵琶湖総合開発計画でキャンプ場と湖岸を道路が横切ることとなり、新たな場所を探し日本海に久美浜キャンプ場を開設。テントだけで従来にはないダイナミックなプログラムができましたが、メンバー、リーダーとも体力勝負のようでした。キャンプ場それぞれが持つ特徴に合った素敵なキャンプはリーダーシップの積み重ねの上で成り立ちます。



《大型カッターボート “ネッシー”》

▼いつまでもキャンパーとして

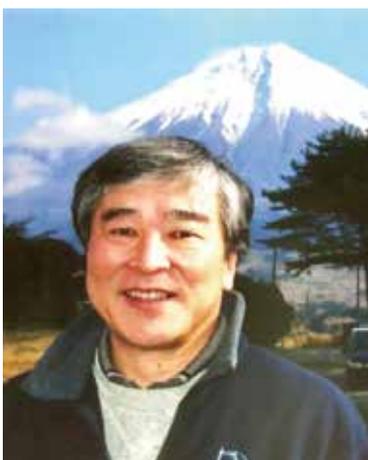
私は高校3年生のキャンプ最後のカウンセルファイアの火を眺め「これでサバエも卒業か」と感傷的になっていたところ、前年のカウンセラーから「リーダー不足のため翌年キャンプができるか分からない」と聞き、「来夏は御礼奉公に来ます」と約束してしまったのがリーダーになったきっかけです。それからは、中学生男子キャンプ時代のメンバーが「サバエには君が必要だ、サバエが君を待っている」の一言で何人もリーダーになりました。

このような強く深い思いを持つリーダー達がいれば、上杉鷹山の「埋もれ火」の例えではありませんがリーダーが少なくても必ずや、必ずや精神は受け継がれると信じます。サバエ、富士山含め余島、野尻湖、阿南など各地には歴史のあるキャンプ場が多く、それぞれに携わった人達の分だけストーリーがあり、形は変わってもキャンプへの想いは積み重ねられ引き継がれてきたのだと思います。

シャワシャワと白い砂浜に寄せる波。ちょっと湿ったやわらかな風が高く伸びた松の枝を揺らして行く。青い空にところどころ雲が浮き、対岸に見える比良の山々の上をゆっくりと流れて行く。それが私の原風景です。きっと多くの人々にもそれぞれの原風景があるはず。私は、現在は富士山YMCAの運営委員をさせていただいています。琵琶湖、富士山と素晴らしい自然に恵まれたキャンプ場に関わることができました。キャンプ事業はどれも大変ですが、富士山はテント泊を中心に週末は多くの利用をいただいています。これからの時代も子ども達の組織キャンプの必要性は絶対にゆるぎませんが、今流行りの「ソロキャン」や「ゆるキャン」なるようなスタイルで自然と対峙するようなキャンプもあっていいと思います。新型コロナウイルス渦で大変な状況下ですが、キャンプの火を絶やさないことが今我々としてやらなければならないことではないでしょうか。

YMCAのキャンプは社会になにがしかの提言をしてきました。ユースのリーダーの想いとパワーがこれまでキャンプを支え続けてくれており、リーダーの皆さんには心から感謝いたします。これからのキャンプを支える方たちと「明日の指導者は今日つくられる」を実践しメンバーとリーダーを育て、より良きキャンプを共に目指していきたいと思います。子ども達の歓声が響くキャンプが何よりの好物です。

Profile



1953年生	京都YMCAサバエキャンプに小学4年生から高校3年生まで毎夏参加
1972年～1976年	京都YMCAリーダー メーカー勤務時、フランス、コートジボワール、シンガポール、米国駐在を経験 シカゴ双葉会日本人学校の運営にも携わる
1998年～2002年	横浜中央YMCA運営委員
2008年～	富士山YMCA運営委員
2020年～	横浜YMCA常議員、公益財団法人横浜YMCA評議員

【取材：滋賀YMCA総主事 久保田展史】